

一橋大学法科大学院視察結果

- 1 日時
平成26年4月24日(木)午前11時00分から午後1時00分まで
- 2 場所
一橋大学大学院法学研究科（法科大学院）
- 3 出席顧問等
納谷座長，阿部顧問，有田顧問，橋本顧問，山根顧問，吉戒顧問
- 4 法科大学院概要説明
別紙1のとおり
- 5 授業見学
「公法演習Ⅱ」渡邊康行教授（3年次・必修科目）
「刑事実務概論」青木孝之教授（3年次・必修科目）
- 6 教員との意見交換会
 - (1) 教員の出席者
高橋副学長，青木（人）法学研究科長，阪口法科大学院長，橋本教授（前法科大学院長），滝沢教授，小粥教授
 - (2) 概要
別紙2のとおり
- 7 学生との意見交換会
 - (1) 学生の出席者 5名
学生A（3年生・既修・法学部出身）
学生B（3年生・既修・法学部出身）
学生C（2年生・既修・法学部出身・社会人経験あり）
学生D（1年生・未修・非法学部出身）
学生E（1年生・未修・法学部出身・社会人経験あり）
 - (2) 概要
別紙3のとおり

○概要説明

(入学定員)

1 学年の入学定員は既修 60 名，未修 25 名である。既修者は認定試験を受け，2 年次に編入される。本日の視察対象のクラスは既修と未修の混成のクラスである。

(入学選抜方法の特徴)

英語力を重視していること。全員面接を行うこと。

(履修課程の特徴)

履修課程の特徴は次のとおりである。

- ・ 未修者について，1 年次は憲法・民法・刑法・民事訴訟法・刑事訴訟法の基礎的な 5 科目に限定しており，会社法，行政法は 2 年次以上に担当していること。
- ・ 英語を使って学ぶ科目が必修であること。
- ・ 少人数教育を行っていること。
- ・ ビジネスロー・コースを選択できること。
- ・ GPA1.7 を進級修了の基準としている。
- ・ 学生の総復習を促すため，進級試験を 1 年次から 2 年次の進級時に課すこととした。

(実績の特徴)

入学試験の出願倍率は高く，4 倍弱の出願倍率となっている。司法試験の合格率が高く，受け控えが少なくなっているが，受け控えが少ないのは修了時点で実力がついてきている自覚があるものと認識している。修了生が多方面で活躍している。累積合格率の高さは本校の誇れる点である。

(課題)

未修者の成績が伸び悩むので，未修者を適切に評価する方法を考える必要がある。

また，モチベーションを維持させる工夫を講じることも必要である。進級試験もその一つである。進路については，法廷だけではなく，企業法務や官公庁での活躍の場所もあるという意識を持たせるためにもセミナー等を開催する必要がある。

○質疑

(顧 問)

法科大学院発足当時と比較した学生の変化について説明していただきたい。

(法科大学院)

発足当初は法曹になるという自覚を持って入学してくる学生が多かったが，今は進路の一つとして法曹もあると考える学生も入学してきている。なんとしても法曹になるんだという自覚が薄れてきている傾向がある。

(顧 問)

ビジネスロー・コースを選んだ人の特徴を教えてください。

(法科大学院)

ビジネスロー・コースでは最先端科目の講義を受けることができるので、将来ビジネスローに進むことを希望する学生が多い。

(顧 問)

法学未修者への教育内容及び方法について教えていただきたい。

(法科大学院)

予習課題を与え、解説の時間を多くしている。2年生以上は演習が多い。

(顧 問)

進級試験はどういう内容か。

(法科大学院)

進級試験は、憲法・民法・刑法・刑事訴訟法・民事訴訟法の5科目を各45分で行い、共通到達目標の課題をいくつか論述させる内容になっている。

(顧 問)

予備試験合格に基づく司法試験合格者と法科大学院修了資格に基づく司法試験合格者の間で、あるべき法曹の違いを知りたいと思っているが、もしあるとすれば、それは何か、思うところがあれば教えていただきたい。

(法科大学院)

難しい問題だが、司法試験合格よりその先の法曹像を見据えながら教育を行っており、授業はかなり実践的な質問が多く、覚えることよりも、考えることが多いのが特徴である。

○教員との意見交換会

(顧問)

法科大学院と普通の大学院で授業の違いはあるのか。また、司法試験対策という観点から授業を行うことはないのか。

(法科大学院)

(前者について) 共通する部分はかなりある。例えば(公法演習について) 受動喫煙防止条例に関して、どこまで条例で線引きをできるか考える点は同じだが、法科大学院の授業では、こういった問題点があり、その先に条例を作るとしたら、どうしたらよいかということまで行っている。

(後者について) 司法試験を想定して授業は行っていない。本日見学された授業のうち刑事実務概論は司法試験科目ではないため、学生が意欲を持ちにくいことも考えられる。しかし、実務的な視点から法曹の活動を学んでいくことは法現象を多角的に見ることができる。直接は役立たないかもしれないが、修了した学生から、あの時学んだことが試験にも役立ったと言われ、うれしく思ったことがある。教員は指導的に新しい判例を作る法曹になって欲しいと思いながら指導に当たっている。また、司法試験と法科大学院の授業は実務的な部分と比べても齟齬はないと思っている。

(法曹養成制度改革推進室)

司法試験対策を行っていないにも関わらず、トップクラスの司法試験合格率を誇る一橋大学ならではの要因は何かあるか。また、一橋大学の入学試験は高い競争倍率であるが、その要因についても教えていただきたい。

(法科大学院)

一橋大学の法科大学院が発足したとき、「高い志でやろう。司法試験は7割の力でやって欲しい。将来のなるべき姿を想像して学んで欲しい。学生同士の間においても、学生と教員との間においても、緊張感を持って接して欲しい。どんな法曹になりたくて、そのためにはどういう能力が必要なのか考えて欲しい。」と考えていた。そのため、学生も教員に対し厳しく当たってくるし、教員もそれに応じている。学生同士も積極的に自主ゼミを行っている。本学がうまくいっているのは、発足当時の考え方があるからではないかと思う。

入学試験が高い競争倍率だということだが、特に何もやっていない。司法試験の実績や、OB・OGの活躍によるところが大きいのではないかと思う。オープンキャンパスも行っているのだから、それも要因の一つであると思う。

(法科大学院)

(トップクラスの司法試験合格率を誇る理由について) 視察の際にはいつも受ける質

問である。教授会できちんと分析したわけではないが、本学の規模が適正な規模であることが要因ではないかと考える。また、一つの授業科目について、複数の教員が受け持つのではなく、最初から最後まで同じ教員が責任をもって受け持つこととしている。それが学生と教員との信頼関係を強めていると考えている。自主ゼミが盛んに行われており、教員と学生、学生同士の努力が高い合格率に結びついている。

入学試験が高倍率であることは、オープンキャンパスだけが原因というわけでもないと思うが、教員が法科大学院の教育に非常に熱心に取り組んでいることを学生が感じ取ってくれて、うまくいっているのだと思う。

(顧 問)

学生から教員に対する評価はどのように行っているか。また、自主ゼミが盛んだということだが、答案練習を行うことはあるか。

(法科大学院)

(前者について) 学期が終わると評価アンケートを行っており、日常的に行われている。ただ、それだと翌年度にならないと、評価アンケートの結果を反映した改善ができないので、2、3回授業が終わったタイミングでアンケートを行って、それを早いうちに活かそうとする教員もいる。

(後者について) 学生同士で多くの自主ゼミを行っており、互いに答案を書きあうゼミはある。ゼミで書いた答案を教員に持ってくることはあるが、法科大学院では中間試験又は期末試験しか、教員が添削を行うことはない。個別で学生が答案の書き方について質問にくることはある。

(顧 問)

授業の様子をみて、熱心ですばらしいという印象を受けた。成績が良くない者への補習はあるのか。

(法科大学院)

学期中に補習を行う制度はないが、学期ごとにD評価が3割以上またはGPA 2.0未満の者を対象として、教務担当の教員と院長で手分けして面談をして、次の学期につなげようとしている。各教員が共通して危ないと思う学生に対しては、教員全員で対策を議論するようにしている。

(顧 問)

自主ゼミについて、教員が入って少人数でゼミを行うことは、制度上確立されているのか。

(法科大学院)

自主ゼミに教員が出ることはないが、学生が個別に相談してくることはある。3年次には教員が指導する発展ゼミがあり、このうち刑事法と憲法のゼミでは人権クリニック

を行っている。また、刑事法のゼミでは全国の上訴事件について、弁護士と一緒に事件の依頼を受けて、学生と議論を行うことがある。

当初は未修者を対象にした導入ゼミがあったが、未修者の中でも純粹未修者と法学を学んだことがある者がいることから、途中から純粹未修者等を対象とする随意履修科目として導入ゼミを設置している。

(顧 問)

入学者の選抜試験の成績と司法試験の合否、学部の成績の因果関係のフォローをしているか。また、未修者の適性について、チェックしているか。

(法科大学院)

成績について、相関関係にあるかどうか、法科大学院として分析したことはないが、教員が個人的に行ったことはある。適性試験の成績と学内の成績は逆相関になってしまったが、これは、本校では入学者が適性試験の上位グループの者に限られているせいかもしれない。入学試験、学内の成績、司法試験の成績との間には相関関係があった。適性試験についてはデータが取りきれていない可能性がある。

未修者については、成績の差が大きく上下に二分する傾向があるので、成績不振者がどのようなところでつまづいているのか、学期ごとの院長、教務担当教員との面談やFD会議での1年生科目担当教員の報告を通じて把握し、教員全員で問題を共有するように努めている。

(顧 問)

選択科目の履修のばらつきはあるか。

(法科大学院)

一般的な傾向として、司法試験にある科目は履修者が多いが、司法試験に含まれない科目は履修者が少ない傾向にあるが、極端な傾向ではない。もともと、試験に含まれない科目を履修する学生ほど、合格率は高い傾向にある。

(法曹養成制度改革推進室)

ビジネスロー・コースの学生は千代田キャンパスに通っているのか。また、ビジネスロー・コースの科目は司法試験に含まれていないが、ビジネスロー・コースを履修する学生に焦りはないのか。

(法科大学院)

ビジネスロー・コースは千代田キャンパスで開講しており、学生は国立から週1回通って受講している。志望者が多く、選考が必要となった場合もあるが、おおむね希望者全員の履修が認められている。ビジネスロー・コースを履修している学生は余裕のある者が多い。選択科目を一日でまとめて履修する形で実施しているので、学生の負担になることはない。

(法曹養成制度改革推進室)

予備試験が実施された前後で学生が授業へ臨む姿勢に変化はあるか。

(法科大学院)

一橋大学において、法科大学院教育に影響は出ていない。予備試験に専念している者はいないので、学生が授業へ望む姿勢に特に変化はない。昨年の予備試験では66名中13名が合格している。13名の内訳の大半は3年生である。メリットは就職活動のときにあると考えている者が多い。多くの者は実力試験と考えて受験しているようである。2年生では2～3名の合格者がおり、そのうち1名が退学した。

(顧問)

予備試験合格者が増えている状況をどう考えるか。

(法科大学院)

個人的に、予備試験制度は超特急制度であると考えている。予備試験に合格しても法科大学院に残って学んで欲しいし、学部で予備試験に合格しても法科大学院へ来て学んで欲しい。予備試験制度は問題があると感じている。

(顧問)

経済的な支援はあるか。

(法科大学院)

法科大学院の制度としてではなく、大学の制度として授業料免除制度があり、多くの学生が受けている。

(顧問)

一橋大学の学部からはどれ位の学生が来ているのか。

(法科大学院)

30%位の学生が一橋大学出身者である。これまでは一橋大学からの入学者が一番多かったが、本年は一橋大学からの入学者と中央大学からの入学者が同数となった。

(顧問)

出身大学のバランスが変わり、一橋大学の出身者が減ったことについて、どう対応するのか。また、授業料免除制度は何人くらい利用しているのか。

(法科大学院)

一橋大学から入学する学生が今年は3割を切っており、学部の学生がどう考えているか分析するのは今後の課題である。授業料免除制度を利用しているのは30人位いる。

○学生との意見交換会

(法曹養成制度改革推進室)

まずは学生の方々から自己紹介と一橋大学法科大学院へ入学した志望動機、どういった法曹になりたいか、教えていただきたい。

(学生A)

既修3年生。一橋大学法科大学院へ入学した志望動機は、学部が一橋大学であったこと、一橋大学法科大学院の司法試験の合格率の高さに魅力を感じたことである。将来は弁護士志望で、町弁となり個人で事件を受任できるようになりたい。

(学生B)

既修3年生。学部は早稲田大学だったが、一橋大学法科大学院へ入学した志望動機は、3年次にビジネスロー・コースを履修できること、展開先端科目の講義を受講できるからである。将来は企業法務で知的財産を扱う弁護士になりたい。

(学生C)

既修2年生。一橋大学法学部を卒業後、国家公務員として働いていたが、退職し、一橋大学法科大学院へ入学した。一橋大学法科大学院へ入学した志望動機は、学部が一橋大学であったことと、ビジネスロー・コースに魅力を感じたからである。将来は企業法務を扱う弁護士になりたい。

(学生D)

未修2年生。他大学経済学部の出身で純粹未修者である。卒業後、一橋大学法科大学院へ進学した。元々、学部を選ぶ際も法律を学びたいと思っていたが、大学卒業後の進路選択の際にも法律を学びたいという思いがあり、法科大学院への進学を決めた。一橋大学法科大学院を選択したのは司法試験合格率の高さに魅力を感じたからである。将来は人に寄り添う町弁になりたい。

(学生E)

未修1年生。他大学卒業後、民間会社の総合職として働いていたが、退職し、一橋大学法科大学院へ入学した。民間会社で働いているときは、女性が少ない環境であり、法律のバックグラウンドを身につけたいと思い、法科大学院へ進学することとした。将来はセクハラ問題や女性の人権問題に携わりたい。

(法曹養成制度改革推進室)

一橋大学法科大学院へ入学してよかったと思うことは何か。

(学生A)

大学の先生と実務家の両者から学べることは非常に良い。また、先生からの熱意を強く感じる。「君達が新しい判例を作るんだよ」と指導されるので、上を目指すという気持ちになり、モチベーションが高まり、良かったと思っている。

(学生B)

本学は学生でも一定の水準以上の者が集まっており、学生同士で自主ゼミを行うことができるので良かった。

(学生C)

一人で勉強することに限界を感じることもあるので、周囲にレベルの高い者がいるのは刺激があって良い。また、先生が指針を示してくれるのも良い。

(学生D)

授業はソクラテス式の授業であること、未修者クラスの人数は25人でメンバーと法律の話をするにもちょうどよい人数であることは良い。また、レベルの高い学友の存在も良い。学友と話をしていて、自分自身のレベルが高められる面もある。

(法曹養成制度改革推進室)

学生Dは純粋未修だが、周囲に追いつくための努力、苦労はあったか。

(学生D)

周囲に追いつくために努力しないといけないことはたくさんある。まずは法律の知識に差があるので、一年間でその差を埋めるのは難しいことだと感じている。

(学生E)

学友の存在が大きい。学友から様々な意見が出ることがあり、予備校よりも学友の存在の方が自分のためになっていると思う。多様なバックグラウンドを持った学友から生き方に刺激を受けることもあるので、その点は良い。

(顧問)

受験準備という観点から学校の授業と自主ゼミだけで十分だと思うか。

(学生A)

司法試験の科目は法科大学院の受講科目よりも少ない。全てを授業でカバーできるわけではないが、自主ゼミでも相当な部分はカバーできる。それでも司法試験までの勉強は自分で意識的にやらないと難しいと思う。

(学生B)

必須科目については、授業及び自主ゼミ等で合格レベルまで達しやすいと思う。選択科目については、自習によるところが大きい。

(学生C)

2年生の授業が一番たいへんで、今は授業の予習復習で精一杯。自主ゼミを組んで授業に臨むようにしている。司法試験の勉強はあまりできていない。

(学生D)

月一回、弁護士が来るTA（ティーチング・アシスタント）ゼミで答案の書き方の練習を行っているが、論述対策はそこでしか勉強しておらず、数は足りていない。

(学生E)

司法試験のために何を行えばよいか、クラスで話し合っている段階。一人で取り組むのではなく、みんなで取り組むことができる点は良かった。

(顧問)

(学生C、学生Eへ) 一橋大学法科大学院に合格したから仕事は辞めたのか。

(学生C)

合格したから辞めた。

(学生E)

合格してから、上司に相談し、辞めた。

他の私立大学にも合格しており、そちらでは授業料免除に加え、生活費を年間100万円の援助もあり、そちらに行くことも考えた。

(顧問)

司法試験対策は全体の学習時間のどれ位やっているのか。

(学生A)

全体の学習時間の2割位。

(学生B)

全体の学習時間の2～3割位。

(学生C)

ほぼ司法試験対策は行っていない。

(学生D)

ほぼ司法試験対策は行っていない。

(学生E)

択一試験の対策は始めている。全体の学習時間の4割。

(法曹養成制度改革推進室)

今年の司法試験予備試験を受験する人はいるか。

(学生A・学生B)

受験する。

(法曹養成制度改革推進室)

なぜ受験するのか。また、対策は何かしているか。授業等への影響はあるか。

(学生A)

まわりに流された面もあるが、意識を高めるために受験する。対策としては、択一試験のみ行っている。授業等への影響はない。法科大学院では勉強の仕方、考え方について、全てを受け身で学ぶつもりはないので、相反することをやっているつもりはない。

(学生B)

予備試験は一つのステータスであるから、受験する。朝の1時間しか勉強していないので、授業等への影響はない。

(法曹養成制度改革推進室)

今年の司法試験予備試験を受験しない人(学生C、学生D、学生E)は、今後、受験する予定はあるか。

(学生C)

今年も受験しようと思っていたが、出願しそびれてしまった。3年生になったら、ステータスと模擬試験の意味合いで、受験する予定。

(学生D)

授業の予習復習で忙しいので、今年を受験しないが、来年は受験する予定。周りにも受験する者は多い。

(学生E)

来年は受験する予定。自分の到達度を測る意味で予備校の試験よりも良いと聞いている。

(学生A)

最後にひと言わせていただきたい。法科大学院で今やっていることが司法試験及び就職の際に評価されるのか気になる。司法試験制度と法科大学院教育のリンクがうまくいっていないように感じる。

(法曹養成制度改革推進室)

司法試験にない科目も勉強しなくてはならず、負担は大きいですが、適正に評価されているので、引き続き学習に励まれない。